

里山を背に、建ち並ぶ 頑丈な造りの養蚕農家

[歩いて・見た・歴史の家並み] - ②

六合村赤岩

(群馬県)



赤岩地区の北端にある上の観音堂は宝暦14年(1764年)の創建とされる。



群馬県の北西、長野県・新潟県と県境を接する六合村は明治33年(1900年)、草津村(現在の草津町)から分村し、赤岩、日影、小雨など6つの大字を合わせて一つの村になった。「くにむら」という村名は、古事記の「天地四方を以て六合と成す」にちなんで名付けられたという。

赤岩地区は標高700m前後。大半を山林が占めて水利に恵まれず、麻の栽培や養蚕が普及した。記録によれば、養蚕は明治初期にはすでに行なわれていたようだ。養蚕が盛んになるにつれて、養蚕に適した頑丈な農家が建築されるようになった。

その典型的な一軒、関駒三郎邸は往時、養蚕のための農家としては県内最大級だったという。

幕末から明治前期にかけての建築といわれる主屋は、間口10間、奥行き4間半の総三階建て。当初は茅葺き(現在は瓦葺き)の二階建てだったが、

後に増築されたようだ。1階は生活の場で、2、3階を養蚕に用いていた。2階は、蚕棚などが配置しやすいように間仕切りのない空間になっており、広さはおよそ100畳(!)。3階も同じように広い。家はすべてにがしりした造りで、梁や柱の一本一本が風雪を経た歴史を物語っている。

建物正面の端部を外壁より前に張り出したデバリ(出梁)があり、手すりのある“縁側”が設けられている。「通路にしたり、濡れた桑の葉を乾かしたりしました」(関さん)

赤岩地区にはこうした養蚕農家が数多く現存しており、その屋敷は農作業を行なう前庭を中心に、主屋、蔵、小屋などで構成されている。また、石垣や樹木などで構成される敷地、通り沿いの景観、農地と山の境界地に配置された仏堂や神社、周囲の農地や森林など、江戸時代からの環境がまだ

十分に残っている。これらのことから平成18年7月、地区を貫く赤岩本道を中心とした周辺の農地、集落の周りの墓地やお堂・神社、山林などをひくくめた約63haの広い範囲が、「地域的特色を顕著に示している」として国の重要伝統的建造物群保存地区に選定された。

赤岩本道を歩く。

北関東の春は歩みが遅い。4月下旬なのに家々の屋敷には桜が咲き、芝桜が地面を濃いピンクに染め、里山ではウグイスが鳴く――。

総三階建ての湯本禮邸、往時の生糸紡ぎや機織りの技を伝えようという活動の場になっている稚蚕飼育所、安原家の大きな土蔵などすべて印象深い。

集落の南の端には養蚕等展示場(かいこん家(カイコンチ))。かつての養蚕農家の2階部分を改造した広い空間に、養蚕道具や資料などが展示されている。

かいこん家の斜め向かいに赤岩神社。参道脇の満開のレンギョウに燦々と春の陽光が降り注ぎ、その先に建ち並ぶ赤岩の集落――。

桃源郷のようであった。



- ① 総三階建ての関駒三郎邸。当初は茅葺きだったが、現在は瓦葺きである。
- ② 広さ100畳の2階は間仕切りがなく、蚕棚などを配置しやすかった。
- ③ 「濡れた桑の葉を乾かしたりした」というデバリ(出梁)の上に設けられた縁側。



地区内で最も大きい、安原家の風格ある土蔵。1階には穀物を貯蔵する穀櫃が設置されているという。



文化3年(1806年)頃の再建とされる湯本禮邸。玄関前の満開の桜がとりわけ印象的だった。

小高い里山を背に、傾斜地の中腹に民家が連なり、その前面に畑地が広がる赤岩地区。春の陽がやわらかい。



燦々たる春の陽とレンギョウと赤岩の集落。里山から野鳥の鳴き声が響く。



赤岩神社の鳥居。鳥居から300mほど続く参道の先にある拝殿は明治41年(1908年)の建築である。



養蚕等展示場(かいこん家)の内部。昭和7年建築の養蚕農家、篠原家の2階部分を改造して展示場にしたという。